

コンゴ王国のキリスト教化

コンゴ共和国の首都ブラザビルの中心地に、セント・アンヌ教会 (Basilique Sainte-Anne) がある。この教会はコンゴ共和国がフランスの植民地統治下にあった1943年に建てられたもので、同国におけるカトリックのシンボルとも言える教会である。ブラザビルが第二次世界大戦時に「自由フランス」の首都だったことも、この立派な教会建設に影響しているようだ。しかし1990年代、同国の急激な民主化が引き金となって起こった内戦により、教会は砲弾を受け、緑の美しい屋根は無残な姿となった。その後、数年間は屋根と同じ色のシートがかけられていた。

コンゴ共和国では、人口の約半数がキリスト教徒となっているが、一般にサハラ以南のアフリカの国々ではキリスト教 (カトリック、プロテスタント諸派を含む) が普及している。外務省のホームページを参照すると、隣国のコンゴ民主共和国では、カトリックを中心としたキリスト教が85%となっている。ザンビアでは8割近くがキリスト教。2013年3月初めてイスラム政権が誕生した中央アフリカ共和国でも、人口の半数がキリスト教である。赤道ギニアに至っては99%がキリスト教となっている。

こうした地域におけるキリスト教の本格的な伝道は、15世紀の大航海時代に遡る。当時、ヨーロッパ諸国にとって「暗黒大陸」であったアフリカでキリスト教を積極的に受け入れた先駆者が、ポルトガルと友好関係を結んだコンゴ王だった。1491年に到着したポルトガル船では、王国内での伝道活動を視野に入れて、石工や大工など教会の建築に関わる技師などが送られている。コンゴ王の命によって王都であるンバンザ・コンゴでは教会の建設が進められ、2カ月という短い期間で教会ができあがった。同年5月にはその落成式が行われ、王自身が洗礼を受けてキリスト教に改宗したことを王国内に宣言した。この時、王国内から約10万人が集まったと言われている。改宗したコンゴ王はポルトガル王に敬意を表する形でその名前をもらい受け、ジョアン2世と改名。同じく改宗した後はエレアナ、長男はアフォンソとそれぞれ改名した。また、都の名前もサン・サルバドールに変更し、王国の急速なキリスト教化を進めていったのである。

ただ、国王に倣って改宗する臣下がいる一方で、洗礼を受けなかった者も少なくなかったようだ。ヨーロッパの宗教に接近することによって、それまでの伝統的社会秩序が乱れることを危惧する者も多かったようだ。また、国王と敵対関係にある者もいた。王国のキリスト教化に反対する者のなかに、国王の次男であるムパンズ・ア・ンジンガがいたが、やがてそれはジョアン2世の後継問題へと発展していく。

国王の洗礼と時期を同じくして、地方で反乱が起こった。キリスト教の後ろ盾を受けたジョアン2世は、教皇イノセント8世の祝福を受けた十字の刺繍の旗を掲げ、その制圧に向かった。それは異教徒に対する聖戦であったようだ。反乱はすぐに鎮圧されたが、そこではポルトガルから導入された火器が大いに威力を発揮したことだろう。この戦闘に勝利したことによって、ポルトガルの伝道師たちはより優遇され、王の都には彼らのために特別区域が用意された。

しかし順調にことが進んだのは当初のわずかの間だった。なぜなら、急速なキリスト教化によって、教義と伝統的社会の価値観や習慣との摩擦が明らかになってきたからである。一番の問題は、コンゴ人が伝統的に信じてきた万物の創造主である「ンザンビ・ンブング」への信仰だった。彼らがキリスト教の神をこの創造神に置き換えていたとしても不思議ではないだろう。ピーター・フォーバスは以下のように分析している。

彼らはまたこの神 (ンザンビ・ンブング) が、いと高きが故に極めて遠く離れていて、人間の影響をまったく受けつけず、したがって祈っても無益だと考えていた。もっとも下位の神々、人と地にもっと近く、日々の生活の事柄にもっと身ぢかくかかわっている神々こそ、懐柔したり買収したりでき、祈り手が注意を払う価値のある存在だった。そこで、自然神、祖先の亡霊、あらゆる種類の霊魂などこそ、それに付随する魔術や妖術、占師、偶像、魔法の儀式とあいまって、コンゴ人の宗教を構成しているもの、また、彼らが表面上キリスト教に改宗したのちも捨てようとしなかったものだったのである。(102頁)

さらに、伝道師たちは当時の社会に浸透していた一夫多妻制も非難した。一夫多妻は、コンゴの社会において権力や富の目安となっていただけでなく、地方の王国間で政治手段として婚姻関係を結ぶことが重要であった時代に必要不可欠なものであった。

キリスト教化によって引き起こされた伝統社会との軋轢が表面化するなか、その主導者であったジョアン2世が亡くなる。そして王の座を巡って、二人の息子が対立する。ただ、この後継者争いのなかでも、キリスト教の後ろ盾を得ることが大きな意味を持つことになるのだった。

内戦で無残な姿となったコンゴ共和国のセント・アンヌ教会は、2000年以降、修復作業が進められた。その工事費のために、信者たちは寄附を募ったり、教会に関わる物品の販売を行ったりした。しかし、その費用の大部分はコンゴの国家予算でまかなわれた。そこには内戦による損失という政治的理由もあっただろうが、コンゴ王国の時代と同様に、現在もサブサハラの



Basilique Sainte Anne (2012年)

アフリカ社会におけるキリスト教との深い関わりを感じる。2009年3月、ベネディクト前法王は、カメルーンとアンゴラを訪問した。法王は、現在も信者数が増えているこれらサブサハラの地域を重要視して、その年を「アフリカの年」と定めた。そしてこのアンゴラこそ、コンゴ王国によってキリスト教の「種」が蒔かれたところである。

[参考文献]

ピーター・フォーバス『コンゴ河—その発見、探検、開発の物語—』田中昌太郎訳、草思社、1989年。